

玉川上水・野の花だより No. 1 2

カワラナデシコ (*Dianthus superbis* L. var. *longicalycinus*)

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子

2026年 5月28日

やわらかいピンクの花が風に揺れています。明るい草原や河原にみられるカワラナデシコが咲き始めました。ナデシコは、北半球の温帯域にみられる花で300種にもものぼりますが、日本の固有種の一つが、このカワラナデシコです。別名を「大和ナデシコ」ともいい、秋の七草のひとつとして、古くから親しまれてきました。学名の由来は、ギリシア語のDios（神）とAnthos（花）で、神より与えられた花を意味します。

草たけは約30～50cm、5枚の花弁の先端が細かに分かれ、空に溶け込んでいきます。花が終わると長い筒の中に、多数の黒い種がつくられます。これが拡散し、毎年、絶えることなく、世代から世代へと受け継がれてきました。

カワラナデシコは、清少納言が『枕の草子』六十七段「草の名は」で、次のように書き記しています。

草の花は撫子（なでしこ）、唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。
をみなへし（女郎花）。桔梗（ききやう）。あさがほ（朝顔）。かるかや（刈萱）。菊。つばすみれ（壺堇）。竜胆（りんだう）は、枝ざしなどもむかしけれど、こと花どものみな霜がれたるに、いとはなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。

大山緑道で、風に揺れているナデシコは、清少納言が愛でた日本の固有種とルーツは同じです。いにしえびとと、時を超え、思いが繋がっていきます。



カワラナデシコ
2026年5月27日
撮影